

# 大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町 京都大学教育学部図書室 (竹村心気付)

TEL 075-753-3013

## 龍谷大学深草図書館における書庫問題

### —現状と対策—

龍谷大学経済学部事務室

村上美代治

- 1 はじめに
- 2 予想を上回る資料の増加と図書館機能の悪化
- 3 緊急の避難対策
- 4 図書館書庫棟建築委員会とプロジェクト委員会の活動
- 5 おわりに

#### 1 はじめに

深草図書館は1961年の経済学部新設に先立って、前年の1960年に既存の建物を利用して開設され、以後、社会科学系図書資料の収集に重点をおいた選書がおこなわれてきた。1973年には現深草図書館がオープンし今日に至っている。この間、年々増加する資料群に対応して様々な対策が取られてきたが、必ずしも十分な効果を上げえなかった。このため、現在収容施設の改善と図書館機能の向上を目指した根本的な改善のために設計業者を交えて増築計画の検討に入っている。本稿では、現在までの書庫問題の取り組みについて報告する。

#### 2 予想を上回る資料の増加と図書館機能の悪化

現図書館が建設された段階において図書館機能面からどの程度の耐用期間を想定していたのかをみてみることから始める。そのため、現図書館の規模が適正であったかどうかをその当時の資料から探ってみることとする。建設実行委員会は「深草学舎図書館建設の基本構想について(答申)」(昭和46年6月)において将来計画として10～15年後には増築が必要になると述べている。また、建築

業者の設計趣意書（昭和47年5月）においても書庫と図書館サービスの充実や利用者の増大による利用者ゾーンの改善の2点から増築の必要性を指摘しており、それに対する具体的提案もおこなっている。資料の増大と研究機能の強化をはかるために増築の方法まで述べている。しかしながら、図書館なる施設はどここの大学でも同様に施設計画において常々後回しになるものであり、財政問題とも絡まって遅々として進展しないのが現状である。その結果、図書が横積みされていたりして、無造作に放置されていたりしている。また、窮余の策として倉庫を借りるなどさまざまの対策が構じられている。本学においても当初計画から15年以上経過し、問題点が指摘されながらも現状放置されたままである。この間、図書館の周りには研究棟や教室棟などが建てられ、増築位置が制限されてしまった。

書庫スペースの不足は年々多くの資料が受け入れられた結果によるものであり、昭和48年3月の蔵書12万8千冊が平成2年3月末には46万5千冊と実に3.6倍に増加したのであった。加えて、雑誌受入点数の増加や図書・雑誌以外の資料いわゆる視聴覚資料も年々増加しており、そのスペース確保することは困難な状態になってきたのである。

書庫の狭隘という事態は、ある意味では大学が教学面を重視し、資料費を重視していることの現れであり、利用者にとっても館員にとっても喜ばしいことである。これは書庫スペースの不足を導くものの、ある意味では苦勞しないで資料の充実がはかれてきたのである。しかしながら、それに見合った施設計画が樹立されなければ、受け入れた資料も十分に利用できず、図書館機能の低下をもたらし、利用者にも好ましくない影響を与えるのである。大学が長期施設計画や財政計画を持たない限り、図書館は図書館施設のなかで自力で書庫問題を解決する以外に道がないのである。当然、空きスペースの利用から手掛けねばならないことになる。たとえ、そのスペースが図書館の調和を保つ役割を持っていたとしても背に腹はかえられないのである。

書庫から溢れ出した図書は利用者スペースを埋めつくし、座席数の減をもたらす。図書館全体が書庫化し、探し求めている資料が即座に見つからないなど図書館が本来果たすべき役割が悪化し、利用者にとっても司書にとっても狭くて複雑でわかりにくい図書館と映るのである。参考までに現図書館が開館した当時の施設パンフレットを見ると、建築に当たって利用者のための領域についての留意点

が述べられており、その中には、「開架スペースにおけるひとつひとつの動きができるだけ閲覧者を邪魔しないこと」「本を読むという行為のもつ内的静的な性格から、閲覧席が通過交通の動線とならないよう、動線の終端部におくこと」「閲覧席にはそれにふさわしい固有の空間をつくと同時に、できるだけ変化に富んだ空間を用意すること」などが記載されている。

### 3 緊急の避難対策

これまで図書館機能の悪化を少しでも避けて、できるだけ正常な状態に戻すために通常の何倍もの労力と手間をかけてきたが、ここ数年はそれも限界に達してきたので、昭和59年10月には部長会の席上において図書館長より深草図書館書庫増築について要望したりして打開策を構じてきた。

一方、この間資料の増大に対処するため、緊急の避難対策としてさまざまなことをおこなってきた。資料の増加の著しいのは雑誌・開架図書・閉架図書の順であったこともあり、書庫移動もほぼ同様の順に実施してきた。昭和57年に大宮学舎の地下に保存書庫が建築されたこともあり、昭和59年7月に大宮図書館に新聞縮刷版や各種新聞復刻版を別置した。それに続いて、集密書架の導入、会議室・会議室廊下の書庫への転用、外国雑誌の図書館外への別置、判例・法令などの資料の利用スペースへの排架、個人文庫や官報、地方史関係資料や未製本雑誌などの資料を逐次大宮図書館に移動してきたのであった。利用よりも管理に重点が置かざるを得ない状況に追い込まれたこともあり、試行錯誤の中で当初開架スペースに排架されていた資料を書庫に、再び利用スペースに排架するといった資料もある。この間、臨時定員増による学生増に対処するために席数を増加させねばならず、減らしてきた席数を増やすため苦肉の策としてソファを会議室用の机に替えたりして数合わせのみ実施してきているが、座席率は依然として非常に低い状況にある。

このように各種資料の移動を図書委員会や教授会の承認のもとに実施してきたが、何分にも日程、労力、時間の制約のもとでおこなわなければならない、他方で開架書架は殆ど利用されない古い資料を書庫に戻すことができず新旧混在の状況で排架しなければならない、図書の乱れをはじめとするモラルの悪化を引き起こすなど、悪循環に陥っている。

#### 4 図書館書庫棟建築委員会とプロジェクト委員会の活動

この事態の打開には根本的な対処しかないので、大学執行部の了承のもとに深草書庫棟建築委員会を昨年度発足させると共に図書館内にはプロジェクト委員会を発足させることができた。プロジェクト委員会のメンバーは館長、課長、課員5名から構成され、最近建築された他大学図書館を視察し、建築までの経過、計画の進め方、建物の特色、サービス体制などを調査し、利用動向、施設の特徴や管理方式なども学んだ。一方、平行して深草図書館の実態を統計から分析し、現在の図書館運営上の問題点を洗い出すとともに長期的な資料の増加予測をおこなったり、図書館の必要な機能や役割とともに増築に際しての位置、必要面積についての検討もおこなった。これらの検討は常に深草書庫棟建築委員会に反映され、本年3月には答申が出された。今年度に入って財務と図書館と設計業者を交えて具体的プラン策定に取り掛かっているところである。

#### 5 おわりに

現在、大学では大幅な定員増が計画されており、この定員増を利用して量から質への転換が検討されはじめている。定員増を利用した恒常化のみならず、教学関係の変更をも検討項目に入れており、財政問題とも絡んで図書館増築は難しい局面を迎えている。しかしながら、現状を少しでも改善するためには図書館主導の計画にもとづいた慎重な計画のもとでの早期着工が望まれる。現在の建物の理念や特色を念頭に置きながら、利用者の要望や魅力的な図書館づくりのためにも図書館が主体的に計画を策定していくことが大事である。当然、これまで利用してこなかった潜在的利用者を増築を機会に図書館に抱き込むことも大きな課題である。大学教育の視点からその役割を果たすことができるのが図書館員である。

大学に対する社会の期待が増大してきている今日においては、大学図書館の評価も今後一層問われてくると考える。図書館自体、様々の固有課題を抱えているが、それらを総合的に検討していく必要がある。図書館増築という1つの課題も大学の長期政策を踏まえながら図書館づくりの中で考えていく必要があり、そのことが大学の中での図書館の地位向上につながると思う。